

# ドイツ海水浴の発展

スウェン・ホルスト

## Abstract

Sea bathing was introduced at the end of the 18<sup>th</sup> century and followed the example of English sea bathing and middle European spas. The first German coastal resort was Doberan near the Baltic Sea, planned and supervised for many years by the physician Vogel and supported by the Grandduke of Mecklenburg-Schwerin. Vogel was very actively promoting sea bathing and Doberan through books, articles, or announcements. It could be seen as a project of an ideal society, where nobles and citizens could mix on equal terms. But soon other sea-bathing resorts sprang up, and Doberan lost against these rivals because it doesn't lay directly beside the seashores and was too much favoured by the local nobility. The citizen class preferred more family-friendly relaxed resorts.

Sea-side resorts were almost exclusively used by the high society and the middle class up to the first decades of the 20<sup>th</sup> century. Bathing resorts appeared to be a "paradise" contrasting the triste city life. But also between the lower middle class and the labourer class the demand for bathing and relaxation in nature developed by bathing in rivers, lakes or citizen pools. In the 20<sup>th</sup> century, the Nazis promised sea-bathing for all, which became reality only after WW II.

## 1. はじめに

ドイツ人の夏休みの過ごし方として、ビーチと海水浴が高い順位を占めている<sup>1</sup>。このような海水浴文化はドイツ国内にとどまらず、国外にまで及び、多くの人が、たとえば地中海のリゾート地を訪ねている。ジェット飛行機での旅行が金銭的に可能になったので、そのような観光客の波は海外まで届いている。いうまでもなく、これはドイツだけの現象ではない。

海水浴やそれにまつわる文化に関する資料として、海水浴関連の観光業で有名な町の歴史や設備、その周辺について解説している市史やガイドブックが多く存在する。そのうちの一つが、ドイツの最初の海水浴場であるドベラーンの建築物をテーマにする研究である<sup>2</sup>。

海水浴場に対する考えは時代とともに変化した。また、コルバンは、1750年から1840年にかけて、人々の海に対する考え方の変化の考察を行った。海は、以前は恐怖の対象と考えられていたにもかかわらず、後にリゾート地として、娯楽的要素を持っていると考えられるようになった。

---

1 53% (2017年) <https://arbeits-abc.de/die-deutschen-und-ihr-urlaub/>、ダウンロード2020. 8. 5。

2 Vogel (2018)。

たのである。その変化を「ディスクルス転変」(Diskurswandel)と呼び、温泉地と海水浴場でその変化を解明する研究もある<sup>3</sup>。ドイツの光史では、19世紀の海水浴場の発展については述べられているものの、極めて短くしか触れられていない。たとえば、シュタイネッケの『ドイツの観光学』では、ドイツのリゾートの発展については、わずか2ページほどしか書かれていない。この一例からさらなる研究の余地があると解る。このように、従来の研究には、19世紀の各リゾートの町の開発から20世紀の海水浴ブームへの発展を紹介する全体像がない。特に海辺と必ずしも関係のない水泳と水遊びはあまり視野に入れられていなかった。この論文では、当時の史料をみながら、温泉浴の延長線でしかなかった海水浴から国民的娯楽である水遊びへの発展について述べる。この発展は設備の拡張と充実だけではなく、社会と思想の変化をも表している。また他の研究と異なり、水泳、そしてその環境と設備にも注目する。

## 2. 入浴文化の再興

古代ローマ人は都会や辺境地のゲルマニアで浴場を建設した。中世には、イスラム文化圏の影響を受けたことで入浴文化が栄えた。そこでは男性が娯婦と遊んだり、食事をしたり、音楽が奏でられたりした。ところが、この文化は近世初頭に途絶えてしまった。これは道徳的理由だけではなく、梅毒の流行等への対処といった衛生面からの抑制であった。結局、入浴文化は、18世紀になると再興されることとなる。宮殿の庭園の中に主に舞踏会のための建物(入浴場御殿)が建設された<sup>4</sup>。さらに、同じ時代には、貴族が、窮屈な宮殿ではなく、鉱泉のある町で夏を過ごすという動きがあった。そのほかに庶民が利用する農民温泉も存在していた。

また、医学研究では、水・湯を利用した治療の効果が説かれた<sup>5</sup>。1792年に当時のドイツの温泉文化をまとめる著書3冊が出版された<sup>6</sup>。これはこのテーマの重要性を語っている。また、イギリスでも医学者が18世紀の半ばから海水浴を勧めた。Russell<sup>7</sup>がブライトンで海水浴施設を造り、海水浴湯治を行った。王族が海水浴を行ったことで、上流階級もそれを真似するようになった。

ドイツでは、物理学者のLichtenbergがイギリス旅行中に海水浴を行ったことをきっかけに、「なぜ、ドイツにはまだ海水浴場がないのか」というレポートを発表し、その創設を呼びかけた<sup>8</sup>。Lotz-HeumannはLichtenbergがディスクルスを大きく方向転換させて、注目ならなかった海水浴に世間の目を向けさせたと評価した。

3 Lotz-Heumann

4 [https://sueddeutscher-barock.ch/In-Werke/h-r/Nyphenburg-Burgen\\_1718-26.html](https://sueddeutscher-barock.ch/In-Werke/h-r/Nyphenburg-Burgen_1718-26.html), ダウンロード2020. 3. 23。

5 ドイツでF. HoffmannやS. Hahn. Sachse p. 29により、Hahn親子はドイツにおける水風呂を再導入させた。イギリスでBuchanのベストセラーDomestic Medicine (1769)。

6 Scheidemantel (1792) Anleitung zum Gebrauch aller Gesundbrunnen und Bäder Deutschlands, C. Hoffmann (1792) Die Gesundbrunnen und Bäder Deutschlands, Zwierlein (1792) Allgemeinen Brunnenschrift. Sachse p. 42.

7 The Use of Sea Water (1753) の前の1750年 Russelはラテン語でDe tabe glandulari, seu de Usu Aquae marinae in M. Glandul Oxon. 発表し、それは1760年にドイツ語にも訳された。

8 Lichtenberg.

### 3. 19世紀の海水浴場の発展

#### 3.1. ドベラーンの発展

Lichtenberg の学生の Vogel は、仕えていたメークレンブルク・シュウェリーン公<sup>9</sup>に海水浴場の設立を提案した。公爵はよく領国外の温泉町で夏を過ごしたので、その費用を自国に使うことだけではなく、来客からの収入によって自国の経済促進になると理解し、この計画を積極的に支援した。近辺には海水浴場に適した町はなかったが、海辺のハイリゲンダムから 6 km 離れたドベラーンは適切な町であった。ロマネスク様式の修道院跡、ゴシック様式の大聖堂、森に囲まれている、というロマンチックな要素で湯治客の滞在に適していると見なされた<sup>10</sup>。既に少人数で観光が行われていた。しかし、ドベラーンには、期待されていた層の客に適した宿泊場所がなかったため、町全体の大改装が行われた。

Vogel は、設立の準備の段階には建築家とともにいくつかの温泉町を視察し、結果として温泉町を手本とすることとした。しかし、入浴のために利用する海水を笕でドベラーンまで引くことができなかった<sup>11</sup>。

また、散策は湯治客にとって重要な娯楽の一つであり、その際のコミュニケーションや交流も重視された。そのため、どんな天気でも散歩ができる散歩道が必要であった。町の中心部に公園のような広場が設計され、宮殿の裏の庭も公開され、近くの丘の上の休憩場への散歩道が整備された。中心の広場には宮殿や宿舎、劇場が立ち並んだ。

しかし、入浴客にとってドベラーンほど自然へのアクセスがよく、簡単、快適に自然との触れ合いを楽しめる街はない。また、ドベラーンほど庭師の技が、自然の野生的魅力を邪魔せず、あまり目立たないように調整された場所はない、といえる<sup>12</sup>。

大公は、1793年の海水浴場の設立以来、その美化や機能的な設備に念を入れ、町の発展を図り、毎年夏には楽団などを連れて滞在した。大公たちの滞在はドベラーンに賑わいをもたらし、発展にもつながった。

1796年には観光客にふさわしい宿泊場所が作られ、テナントに貸し出された。このほかにも宿泊場所として改築された民家や、庶民的なホテルもあった。

1801年に完成した大広間が中心となった館は食堂としての機能があり、夜には舞踏会やコンサートが開催された<sup>13</sup>。その他に町中の旅亭でも「選り抜かれたブルジョワ社会」<sup>14</sup>のための食

---

9 1815年から大公になった。

10 19世紀半ばに景観が退屈だという記事もある。個人の感じの差の他に、時代の好みが長閑な景観から壮大な自然へ移った。(Seyffahrt)

11 Vogel (1819) pp. 4-5.

12 Dresen pp. 35-36.

13 Dresen p. 41. 1879年に大広間の建物が市役所と裁判所に改築された。その代わりに1888年に鉄泉入浴館が一階に増築されて、2階に広間を入れられた。現在、再びコンサートに使われている。

事を楽しむことができた。また、ある 2 等級のホテルは、使用人のためのランチを提供した。このように、食事面では、個人的な好みその他に身分意識が見られた。さらに、読書は、湯治期間のなかの楽しみの一つであったので、読書室、後に大公立入浴場図書館が設置された。

1821年には、新しく開拓された鉄泉によって、ドベラーンは本格的な鉱泉町になった。1802年には他の温泉町を真似てカジノが造られ、1804年には競馬も設立された。カジノは毎年利益の半分を大公立湯治局に支払っていたが、1868年には北ドイツ同盟によってギャンブルが禁止されたことで、海水浴場の運営に大打撃となった。

客はドベラーンと、最も近い海辺であるハイリゲンダムとの距離を不便に思っていたが、ドベラーンの民の生計を守るため、大公がハイリゲンダムでの大きな宿舎の建設を拒んだ<sup>15</sup>。しかし、海の眺めと新鮮な海の空気を求めて、ドベラーンの喧騒を避けたい人が増えた<sup>16</sup>。そのため、設立者の大公の死後、浴場館には 3 階が建て増しされた。すべて大公の金で建築されたこの階には宿泊部屋が作られ、テナントに貸し出された。また、3 代目の大公は積極的にハイリゲンダムを支援し、自ら訪れ、大公族の別荘も建設した。

さらに、ハイリゲンダムでは、1811年、24人の貧しい患者が無料で入浴できる病院が設立された。上流階級はこれに寄付することで自らの社会的責任を周囲に示した。

ハイリゲンダムでは、19世紀初頭まで交通インフラの不整備が旅行と観光の大きな妨げとなっていた。1820年代からはこれが少しずつ整備され、1883年には、ロストックー ドベラーン間の鉄道によってドベラーンは全国の鉄道網とつながった。肝心の海水浴場が駅から遠かったので、1886年ドベラーンとハイリゲンダムの間に小型鉄道が設立された。

ドベラーンを訪れた観光客の数は、1794年の307人から、1796年には500人を突破した。この中には入浴を目的としていた人々が100人以上含まれる。さらに、1800年には713人（入浴303人）、1810-20年代には1400人、30年代には1200人を若干上回るほどの観光客が訪れる<sup>17</sup>。

### 3.2. 海浜リゾートの問題

ドベラーンの海水浴場としての設立は Lichtenberg のディスクルス転変に反して、海を否定していると Lotz-Heumann が論じている。確かに、ドベラーンが海岸から離れていることや入浴館と海の間に馬小屋とガレージが建てられたことがこの意見を裏付けている。しかし当事者の記述からこのような否定的な見解が読み取れない。

ここで海水浴に触れなければならない。海水浴は刺激的で、浸透力があり、皮膚の治療に最も適している。今日の最大のニーズの 1 つである皮膚の開放によって、臓器全体とそれを通して神経系を活性化させることが可能である。この海水浴には 2 つの大きな利点がある。

14 Dresen p. 63.

15 Sachse p. 321.

16 Becker p. 9.

17 Sachse p. 311.

ある。1つ目は、病気の治癒力が高いにもかかわらず、健康な人が健康の維持にも自然が補助として使用できることだ。他の多くの温泉はそうではない。それは健康な人に害を及ぼす。「中略」もう一つの利点としては、海の空気、そして海の何とも言えないほど壮大で素晴らしい景色だ<sup>18</sup>。

18世紀初頭、Hufeland は「海の空気」を書き加えた。この加筆が当時の認識の変化を表している。すでに1773年、海辺の空気の健康効果が説かれていた<sup>19</sup>。しかし、当時は、海の湿度は健康に良くないのではないかと疑われる風潮があった<sup>20</sup>。「私たちは入浴施設がある海辺も歓喜の源の一つであると知らなければならない。特に海の眺めに慣れていない方を感動させる。風の強い時には堂々とした波のパフォーマンスが生じる。人々はジッとして、飽きずに数時間眺められる。」<sup>21</sup>入浴館の2階から海を眺めることができた。Vogel は「海の素晴らしい眺め、そして多くの病気に決定的な治療の力を持つ海の空気」<sup>22</sup>と述べたが、それに対し、1819年には、海の空気と陸の空気を混ぜても、健康に対する効果に影響はないと記述していた<sup>23</sup>。これは、内陸に位置するドベラーンの弱点を認めなくなかったためであろうが、客たちが益々純粋な海の空気を求めるようになった。「病気と身体の疾患を洗い流し、それを深い海の底に沈めてしまうために、またその傍らに綺麗な自然と湯治場の娯楽を楽しむために夏の数か月に大勢が集まってくる」<sup>24</sup>と Röper はガイドブックで海に対する恐怖を煽るような喩えを使ったことから、実際には人々の間で海への恐怖はそれほど深刻ではなかったと思われる。恐怖のために海を拒絶したというよりも、海辺への滞在のための宿泊、娯楽といったインフラをゼロから作ることができなかったために、Vogel は陸地のドベラーンを選んだのである。

ロココと啓蒙主義の時代の理想であった、長閑な自然（公園・森）とロマン主義者が憧れた壮大な自然（海）を両立させようと試みたともいえる。

### 3.3. 19世紀の海水浴の発展

1794年、最も近い海辺のハイリゲンダムで、11の個別の浴室、着替えのための部屋、水風呂、温かい風呂を楽しめる入浴施設が作られた。シャワー風呂、ミスト風呂もあった。温泉感覚で海水浴を楽しめた。1817年に建設された新しい入浴場では、団欒を楽しむための部屋や海が眺められるベランダがあり、上の階の8部屋に宿泊できた<sup>25</sup>。この入浴場には、近辺で発見された硫黄泉が地下のパイプを通じて供給された。また、直接海に入りたい人たちのために入浴船

18 Hufeland (1797) p. 421-422, Hufeland (1823<sup>4</sup>) p. 205-206.

19 Sachse p. 29により J.Lind (1773) Über Krankheiten der Europäer in heißen Klimaten Leipzig.

20 Patriotische Gesellschaft p. 373-374.

21 Vogel (1797) p. 232.

22 Vogel (1797) p. 238.

23 Vogel (1819) p. 13, p. 78-79 86-87.

24 Röper (1808) p. 3.

25 Vogel (1819) p. 25-28.



4隻が用意されたものの、不便かつ管理が大変であったため、次第に廃止されることとなった。1819年までに入浴車が14台（婦人用8台、紳士用6台）にまで増えた。入浴車の裏側に入浴者が見られないように出口と階段、海の一部を隠すキャンバスが張っていた。

ただし、今はこのキャンバスクリーンがあまり利用されていない。ほとんどの女性はこのキャンバスの下から外のより深い海に出ている。それは正しい。なぜなら、水の中の自由な運動、また四方から当る風は冷浴の時に絶対に必要だ<sup>26</sup>。

男性の海水浴場には、更衣室と入浴のための棧橋が作られ、後に質のいい浴場と、入場料が安くシンプルな浴場の両方が作られた。一方、女性はもっぱら入浴車を利用したが、1832年、新たに婦人用海水浴場が建設された。女性の客から男性同様により自由に海水浴がしたいという要望があった<sup>27</sup>。女性用、男性用の海水浴場は離れており、外から見られないことは言うまでもなく、海に入る女性同士も互いに見られないように設計されていた。男性用浴場に漕ぎ船に乗った男性監視員、女性用浴場に入浴に同行した女性監視員が配置された。初期には、監視員が水泳を教えると書かれていた<sup>28</sup>が、時を経るにつれて、監視員の泳ぎへの手助けはめったに求められなくなっていた<sup>29</sup>ことから、客が水に慣れ、泳げる人が増えたと解る。

男性は言うまでもなく、女性も自由に海の中で遊ぶようになった。ここにおいて、海水浴が温泉浴のモデルから脱却した傾向を示す。入浴客は海の中に新しい楽しみを発見した。

1820年代から、海水浴が子供の健康に良いという医学的な意見が広く聞かれるようになった。それによって、益々多くの家族連れが海水浴場に来て、家族団欒の時間を海浜で過ごし、ビーチが賑やかになった<sup>30</sup>。

### 3.4. メディア戦略とライバル

Vogel は積極的に海水浴を持つ保養地ドベラーンを宣伝した。まず、Vogel が1794年に海水浴場の設立を予告し、その利点を説いた。彼は1800～1811年の間に10冊の海水浴場の発展と治療に関する年報を発行した。医学雑誌に載せた報告も別刷し、広告に使った。治療の方法とその成功・問題点を紹介しながら、医者が患者に海水浴を進めることを狙った。Vogel が著した入浴のための規則についての本も出版され、ドベラーンの知名度を上げた。さらに、Vogel は、人口鉱泉の飲料の効果を説き、冬の温海水の湯治を勧めた報告も執筆し、1819年にその活動の集大成と言える三巻の叢書を出版した<sup>31</sup>。Vogel の執筆活動によって、彼は海水浴の権威、その

26 Mühry p. 163-164. d'Aumerie も女性を最も勇気ある入浴者と呼んだ (p. 155)。

27 Sachse p. 308.

28 Röper p. 41.

29 Kortüm p. 20. 当時、女性がこのサービスをよく利用した。(p. 18)。

30 ロッシュ p. 104.

31 Vogel (1819)。

「父」と認められて、ドベラーンはドイツの最も海水浴場の地位を占めた。Vogel は医学的なスタンスをを保って意見を述べていたが、同時に海水浴場のリゾート地としてのニーズも見据えていた。その理由から、多くの教養市民が否定した浴場の娯楽であったギャンブルを医学的な理由から弁護した。Vogel の出版活動は効果を示し、医学雑誌でも彼の本は取り上げられた。それに加え、文学、ライフスタイル、法学といったジャンルの雑誌までも Vogel などの著者を取り上げ<sup>32</sup>、その宣伝効果を培った。担当湯治医の執筆活動が重視されて、ライバルの海水浴場も案内や説明を積極的に出版した。

もっと詳しく知りたいという方は、Vogel の出版した25冊の本・パンフレットから、より多くの情報を得られるだろう。(中略) 今日、ドベラーンについて述べた本はあまりない。たとえば、現在の湯治医、コルチュムは、医学雑誌に論文を二つ書いてだけである<sup>33</sup>。

この著者は湯治医の執筆活動の重要性を指摘したが、彼が広報活動として挙げた医学雑誌の二つの論文は努力として足りなかったと判断された。コルチュムはその年にハイリゲンダムを説明する一冊の本を発行した。

また、来客のほとんどがドベラーンのガイドブックを求めていた。最初、ドベラーンの牧師 Röper が1797年と1808年にガイドブックを発行した。1834年には Dresen が「今まで、このようなガイドブックが存在しなかったので、この数頁がそのような役を満たすべし」<sup>34</sup>と述べて、ガイドブックを自費出版した。しかし、ほとんどの内容が Röper の本の引用であり、医学的な情報が載っていないとドベラーンの湯治医 Sachse が指摘した<sup>35</sup>。

バルト海の支持派と北海の支持派の間に両海岸の医学的な効果について激しい論戦が繰り上げられた。北海を支持する者たちは、北海はバルト海よりも塩分が多く、北海の波が体を刺激するのでより効果的であると主張した。さらに、海の風が強く吹くため、北海の海の空気は内陸の空気と混ざっていない純粋なものであるということも彼らのアピールポイントの一つであった。この論争は激化し、後には他の海水浴場の弱点を探して自分の浴場の利点を強調するメディア論争が起きた。

また、宣伝という面では、海水浴場の担当者たちは早い段階からも新聞に広告を出していた。たとえば、Vogel は1797年5月にハンブルクの新聞に広告を出していた。鉄道によって旅がより快適になってからは、遠方のミュンヘンやウィーンの新聞にもドベラーンの広告が出された<sup>36</sup>。

32 Medicinisch-chirurgische Zeitung, 1797 Journal des Luxus und der Moden 1797, Chirurgische Bibliothek 1798, I. V. Rothe Handbuch für die medizinische Litteratur nach allen ihren Theilen 1801; Intelligenzblatt der Allgemeinen Literatur-Zeitung 1797, Allgemeine Literatur-Zeitung 1799, Neue allgemeine deutsche Bibliothek 1799, Gothaische Gelehrte Zeitung 1796, Staatswissenschaftliche und juristische Nachrichten 1799 S. 411.

33 Spengler p. 88-89.

34 Dresen p. 4.

35 Sachse p. 62.

36 Wiener medizinische Wochenschrift と Allgemeine Zeitung München (1857), Fremdenblatt Wien 1. Juli 1865.

さて、1785年、北海のノルダナイ島の隣のユスト島では、ある牧師がノルダナイ島で海水浴場を造ることを東フリシアの医学委員会に提案した。しかしこの案は採用されなかった。フリシア地方の多くの人々がイギリス船の乗組員となっていたので、イギリスの海水浴場に関する情報を耳にしていたのではないかと考えられる。ドベラーンの例のように Vogel という積極的に計画・運営した人とそれを支援した大公のようなパトロンがいなかったため、結局、ノルダナイ島の海水浴場がドイツの第2の海水浴場として1797年に設立され、1820年代から海水浴場として飛躍的に発展した<sup>37</sup>。遅れて造られたノルダナイ島の素晴らしさを広めるため、開発の原動力であった von Halem が宣伝のためにノルダナイを紹介する本を何冊も出版した<sup>38</sup>。その後、何人かの著者がこの海水浴場の発展を世間に知らせた<sup>39</sup>。ある本の序文のなかで、ノルダナイの知名度を上げるために案内を執筆したことを明確に記していた<sup>40</sup>。

さらに、商業都市リューベックでは、富豪たちが夏の住宅を設置するための場所を探していたことをきっかけとして、漁業と海運が主な収入源であったトラフェミュンデで1802年ドイツの3番目の臨海リゾートが誕生した。ここも活発的な出版活動でその活動が公開された<sup>41</sup>。

人々の健康促進の義務感によってトラフェミュンデの海水浴場が昨年生れた。行政の協力、そして何人もの個人が関わって作り上げられた、いわば作品である。素晴らしい気質のリューベック市民の多くから支えられ、病苦を減らすことで人類の幸福を高めることを唯一の願いとして、この海水浴場は造られた。数年前にもリューベック人・外の人々の両方が海水浴のためにトラフェミュンデを訪れていたが、その入浴の不便さから海水浴の楽しさも半減してしまったかもしれない。そのため、多額の自主的な投資により、初期よりも大規模な海水浴場が設立されたのである<sup>42</sup>。

訪問者のための中心地点は、1803年に建立されたクアハウスであり、多くの娯楽が用意された。宿泊部屋は煌びやかというわけではなかったが、清潔感があり、良い眺めを楽しめた。ここから、この海水浴場のターゲットは市民層であったことが読み取れる<sup>43</sup>。民間の計画として、

37 Richter.p. 33, Sachse p. 40.

38 Die Insel Norderney und ihr Seebad 1801. Beschreibung des Seebades zu Norderney 1815. Die Insel Norderney und ihr Seebad; nach dem gegenwärtigen Standpunkte 1822.

39 Bluhm (1824) Ueber das Seebad auf der Insel Norderney. Bluhm (1832/1840) Die Seebadeanstalt auf Norderney.

40 Mühry p. III.

41 Lembke (1803) Ueber die Privat-Seebadeanstalt bei Travemünde. Danzelmann (1815-1817) Annalen des Travemünder Seebades Lübeck. Sachs (1828) Beschreibung des Seebades Travemünde. Saß (1818) Die Seebadeanstalt bei Travemünde in ihrem gegenwärtigem Zustand. W. Saß (1835) Taschenbuch für Badegäste oder Anleitung zum zweckmäßigen Gebrauch des Seebades. F. Lieboldt (1837) Die Heilkräfte des Meerwassers. Mit besonderer Berücksichtigung der Seebadeanstalt bei Travemünde.

42 Lembke p. 15-19.

43 Lembke p. 62.



ブルシュワ階級のために設立した海水浴場であった。ここでは、朝と晩の定期便の他に、適当なときに馬車も出て、毎日郵便物が来たので、リュubeckの商人がある程度、リゾートから会社に指示、緊急の時に駆け付けることができた。1824年から、コペンハーゲンとリガ、サンクトペテルブルクからの定期蒸気船の乗客が来て大流行し始めた。ロシアの富裕層が町に来了。ここに集まる一つの理由は、1833年に設立したカジノであった。その収入は、社会に貢献するように使用されたにもかかわらずしばしば批判の対象となつて、1872年の法律によってカジノは封鎖された。

あるとき、ドベラーンは近隣のワルネミュンデ（ロストック市の近くの港町）との競争に巻き込まれた。観光客はワルネミュンデとドベラーンを比較した。19世紀初頭、人里離れた牧歌的なワルネミュンデが、海水浴場より素朴で静か、悠々自適な生活ができる保養地として選ばれた<sup>44</sup>。宿泊できる施設は素朴であったが、1828年に婦人浴場が設立された。男性は距離を置いて外で服を脱ぎ、海に入った。1833年に暖かい海水に入浴できる施設が建てられ、1834年に開業した。そこで市が1835年に海水浴のための施設を造った。それ以降、自由な海水浴は行政が監理するようになった。

10年前に注目された新しい臨海リゾートが満員だ。表通り、裏通り、横通りのすべての家が宿泊客でいっぱいになった。ほとんどの客が家族全員で来ている。そこでは、父と母、子供が何もせず (*dolce far niente*) に過ごしている。彼らは海で入浴したり、ビーチと「Spill」と呼ばれる港の先端の波止場を散歩したり、家の前庭のテントの下で朝食をとったり、昼食をとったり、午後のコーヒと紅茶を飲んだりするだけだ。また、特にロストックからの友人や親戚を訪ねたり、逆に彼らの元へ行ったりすることもある。やってきた親戚・友人を紅茶やコーヒに誘う。リゾートで時間を過ごす人々にとっては、ゆったりした家族との生活、友人や親戚との時間が過ごせれば十分だった。周辺地域と同様に、このリゾートにはドベラーンとその周りほどの美しい自然は見られない。たくさんの砂、砂、砂、何もないビーチなのだ！ここには、燃えるような太陽の光から身を守るための日陰はほとんどない。しかし、このリゾートで1つ優れている点がある。それは爽快な海の空気だ。「中略」ワルネミュンデの周辺では食料の栽培ができないため、食べ物は他の場所から運ばなければならない。したがって、ここでの生活はドベラーンよりも高くついた<sup>45</sup>。

ワルネミュンデはロストックの市民たちのリゾートとして発展した。ドベラーンと違う来客層であったので、ドベラーンを最良とする教養市民はワルネミュンデに集まるロストック中流階級の小市民のリゾートでの過ごし方に批判的であった。中流階級のリゾート客は、親戚・仲間

44 Schütz p. 1-2.

45 Peter p. 854-857.

と交流するだけで満足していたため、それほど文化的娯楽を求めていなかったし、外の人たちの交流を望んではいなかった。彼らは自分の家から多くの荷物をもって、リゾートで自家同様に生活を続けた<sup>46</sup>。

1840年代、バルト海では「そして今頃、みすばらしい入浴施設がない村や漁師小屋はない状態となった」<sup>47,48</sup>。

さて、ライン地方の住民にとっては、ドイツの北海よりもベルギーとホルランダの海岸の方が近かった。そのため、鉄道が整備されると、ドイツ人がオストエンデ（ベルギー）やシェウエニンゲン（オランダ）を訪ねるようになった。

1841年には、オストエンデのほうが安く楽しめるとドイツ国内で話題になった<sup>49</sup>。しかし、オストエンデが王室、上流階級の間で人気を博し、滞在費が高騰し、イギリス人等が増えたので、社交の難しさにドイツ人からの苦情もあった<sup>50</sup>。

一方、フランスでは、ナポレオン戦争期に海水浴場の開発が止まってしまった。したがって、イギリス、ドイツ、ベルギーに遅れ、フランスでの開発が進んだのは1820年代となった。フランスの海水浴場を訪れたイギリス人は、借金を踏み倒した人や詐欺師、おとなしくない女だったなどとして、ドイツ人からは嫌われる傾向にあった<sup>51</sup>。一方で、オランダでは、ドイツ人は歓迎され、海水浴場での社交ではほとんどドイツ語がつかわれた<sup>52</sup>。

また、バルト海のウーセドム島はベルリンの住民の一大リゾート地に発展した。1842年にベルリンとシュテッティン市、1876年にベルリンとウーセドムを繋ぐ鉄道路線ができた。1821年には26時間～2日間<sup>53</sup>の旅が1901年には3時間半にまで短くなった<sup>54</sup>。これにより、人々はより旅に出やすくなり、中流階級のための静かなアールベックやブルジョワジーの別荘地になった賑やかなスウィネミュンデのように、そのニーズに合わせて、海水浴場が階級別に発展した<sup>55</sup>。イギリスと違って、ドイツには労働者向きの鉄道ツアーがなかったので、上流・中流階級が第1次世界大戦後まで海辺を独占し、夏に長期間滞在した<sup>56</sup>。

46 Freimüthiges Abendblatt (1834) p. 908.

47 Sachse p. 46.

48 コルブン（1992）はドイツのリゾート開発を記述している（p. 494-498）。

49 Die Grenzboten, 1. Jg., Band 1, p. 11-18.

50 R. Flechsig, p. 73-91.

51 Die Grenzboten, p. 11-18.

52 d'Aumerie p. V-VI.

53 Kind p. 86.

54 Bäder-Almanach p. 317.

55 コルバンがスウィネミュンデでの料金によって階級べつの浴場を説明している（p. 535）。

56 シュタイネッケ p. 151.

### 3.5. 衰退

ドベラーンは、「ワルネミュンデは人で混雑するが、ドベラーンは競馬期間以外、静かだ。」<sup>57</sup>と1845年に指摘された。町の前では宿泊施設の使用人が観光客を待ち受け、自分の施設に案内するというような客の争奪戦が行われた<sup>58</sup>。海への移動はドベラーンの一つの弱点となった。毎日の移動費が高いことで、全体的にドベラーンには高級イメージがついていた<sup>59</sup>。そこで、ドベラーン側は、抑えた値段での定期の相乗り便の導入や、食事を安くとる方法の紹介、ワルネミュンデの食材費の高さやそこでの風景の窮屈さの指摘を行ったものの、結局、その高級イメージを拭い去ることはできなかった。

1844年、1年の1035人の来客を分析すると、宮廷劇団の72人、宮廷音楽団11人と1泊しか止まらない近辺（ロストック市）からの来客を差し引いたら、約500人の本当の湯治客しかいなかった<sup>60</sup>。

ドベラーンの海水浴場はトラーベミュンデやブットブス、スヴィネミュンデ、ワルネミュンデと競争状況にある。特にワルネミュンデは観光客からの需要が毎年増している。入浴客が何を求めているのかが、ワルネミュンデには表れているのである。皆が自分の家族とアパートで気楽に過ごしたい。ハイリゲンダムのように大きな宿舎を立てることは、その需要には合わないのだ。ハイリゲンダムに宿泊用の家を数件建設することがドベラーンの家持ちの人々に損害を与えるとは私は思わないが、ハイリゲンダムにとって大きな利益になることは確かだ。というのも、観光客にドベラーンに泊まるよう強制できないからだ。健康やその他の理由で海岸に泊まりたいがハイリゲンダムに宿泊できないという人たちは、かわりにトラーベミュンデやワルネミュンデに行く。これは毎年みられる動きである。経験上、1～2家族向けのアパートが最も人気の宿泊スタイルだと分かっているのならば、なぜハイリゲンダムにこのような宿泊施設を建てないのか。優雅で高貴なものや、馬小屋、馬車のガレージを建てるよりもそのほうが確実に利益になる。馬や馬車でやってくる人や、海水浴よりも娯楽のために来る人がドベラーンに留まり「後略」<sup>61</sup>。

この意見はハイリゲンダムにターゲットを上流階級から中流階級へと変えていくべきだという大きな方向転換の兆しをもたらした。しかし、そのような訴えを受けても、結局は十分に実現しなかった。

「前略」当時、コーンミルヒ氏が管理していた射撃場では、一日中銃がにぎやかな音を立

57 Freimüthiges Abendblatt (1845) p. 650.

58 Freimüthiges Abendblatt (1831) p. 707-709.

59 Freimüthiges Abendblatt (1837) p. 213.

60 Peter p. 855.

61 Freimüthiges Abendblatt (1835) p. 836-837.

て、魅力的な内容の遠足が農村地域や近くの、もしくは少し離れた森で行われた。人々はどこでもたくさんの食事ができ、非常に良いボルドーワイン等を飲むことができた。この状況がかなり廃れたようだ。見事に装飾され、保存されている射撃場の現在の借受人は、訪問者の不足について不満を漏らす訳がある。ウェ이터がビリヤード、投げ輪、ボーリング、その他の楽しい時間の遊具を暇つぶしのために使って、そのワザの腕を磨かなければ、未使用のままではあるはずだ<sup>62</sup>。

この報告をした者が、1872年と1874年のドベラーンを比較し、その衰退を認めた。1872年には、この世紀で最も大きな被害をもたらした高潮と嵐がハイリゲンダムを襲ったため、1873年には公国はハイリゲンダムをある株式会社に売却することとなった。

「前略」この海辺のリゾート、ドベラーン程私を失望させた場所はない。「中略」ドベラーンの海水浴場は、街から半マイル内陸に位置する、いわゆる「ハイリゲンダム」だ。まず、この奇妙な自然の現象の分析から始めよう。その高慢な名称は、皮肉って名づけられたかのようだ。ドベラーンの海水浴場に来るまで、何か大きくて詩的な迫力を持つ自然、または少なくとも一目でわかるような場所だと私は想像していた。私はすでにこの有名な土地を数回散策していたが、私の「いったい、高名な堤防はどこですか。」という問いに対して、人々は「あなたがちょうどその上を歩いていますよ。」と答えた。その場所には、足元に多くの小石があって、岸にはブナが生えていた。私は神聖な堤防について他の描写はできない。リューゲン島のシュテュッペンカンマー、ステッフエ、アイルランドのジャイアンツコーズウェイを想像した。おそらく、70年前に海水浴場ができた時の方が綺麗だったのかもしれない。古代のブナが何マイルも立ち並んで、斜面自体も特徴があった。(のちに、その多くの部分が高潮で流されたと言われている。)これが、この地位の名声を説明できる唯一の方法だ。今は何もない。「中略」最も広い意味での「浴場」に関しても「昔が良かった」と言える<sup>63</sup>。

このような消極的な報道があっても、ハイリゲンダムは落ちついた海水浴場として維持された。交通の便では他の海水浴場と競争ができなかったが、19世紀末に書かれた説明からは、それぞれの施設が使用され続けたことが読みとれる。また、体育館、芝生のテニスグラウンド、子ども用の遊び場、新たな娯楽のための場所も作られた。しかしながら、安定的な運営はできなかった<sup>64</sup>。

62 H.T.

63 Herrlich.

64 Ortschronik.

### 3.6. 避暑のための場所

19世紀末、富裕な市民層が海浜、湖畔、山に夏用の別荘を持った。中流階級はアパート・部屋を借りた。母と子供がそこで夏の長い期間を過ごし、父は時間が許す限り、時間を共にした。これはドイツ語で Sommerfrische（夏の冷やし）と言った。

1858年、貴族がドベラーンを自らの避暑のための場所（Villegiatur）として考えていたという指摘がみられた<sup>65</sup>。Sommerfrische というドイツ語の表現がまだなかった時代である。自分の別荘を持つという考え方はまだなかった。しかし、19世紀後半の別荘建設ラッシュがスウィネミュンデだけではなく、ハイリゲンダムスの近くにも及んだ。ハイリゲンダムより西側の海岸は別荘地として発展して、今は Kühlungsborn（冷やしの源）の名前で一つの自治体になった。ハイリゲンダムにはこのような展開がほとんど見られなかった。今では、ハイリゲンダムは2008年のG7会議の会場に選ばれるほどに、静かで孤立した、しかし数軒の優雅なホテルから成り立っているリゾートである。

## 4. 入浴文化の拡張

### 4.1. 河川浴場 Flußbad

1760年、パリのセーヌ川に入浴のための船を造った。ドベラーンで導入された入浴船はこの河川浴場の船を真似て作った。1777年、ライン川沿いのマンハイム市に河川浴場が生まれたが、医学者はその間違った利用法に対し警告した。1781年、Ferro が水風呂の効果を論究し、ウイーンのドナウ川に入浴船を導入した<sup>66</sup>。これは都市住民の衛生状況を改善する目的で設立された。1793年には、ハンブルク、フランクフルトなどに河川浴場が造られた。そこでは、いかだのように、着替え室や目隠しのフェンスが浮かべられ、その中で人々は入浴した。プロイセンには主に Pfuël 将軍によって体育としての水泳が承認され<sup>67</sup>、注目され始めた。19世紀になってから公衆浴場の導入により泳ぎが急増した。

### 4.2. 国民のための浴場 Volksbad

この表現の「国民」は全国民でなく、庶民を意味した。都市内の入浴場が整備されると上・中流階級が独占し、庶民たちと交わりたがらなかった。

イギリスでは、1842年にリバプールで初めてできた施設のすぐ後に、ロンドンでもそのような設備が造られた。50年代には浴場にプールとスチームバス（初めて St. Ann's Hill アイランド）が建て増しされた。ドイツには、ウイーン（Dianabad 1842年, FörsterとEtzel

---

65 Spengler p. 94.

66 Sachse p. 33-37.

67 “Bad”, Brockhaus (1882) p. 338. Bräuer (2013) p. 28.



によって設立された。冬にはダンス会場として利用される)とハンブルクが大きな室内プールの建設を先駆けていた。なお、民間企業が浴場の設立を独占している。大都会のほとんどに、よく整備された室内入浴場がいくつかある。「中略」そして、ようやく、ハノーファー近くのラインハウゼンで限られた予算によって労働者浴場が建設された。そこでは風呂付きの小さな部屋が4つ、スチームバスの小部屋が2つ、シャワーが一つ備えられている<sup>68</sup>。

後に、民間企業が室内プールを造り、富裕市民に開放した。この状況に対して、庶民の浴場を求める声が高まり、労働者が自力で浴場を造った。

このように、19世紀になってから、公衆浴場の導入によって入浴が本格的に始まったのである。入浴場は、特に、人口の多い都市や地区に設立されるようになった。そこでは、貧しい階級の人々にも低価格で温かい風呂に入る機会を提供した。また、近頃では、入浴者は施設での短期滞在中に服を洗濯してもらうこともできる。「中略」このイギリスの例を参考にして、ブリュッセルとハンブルク(1852)、ベルリン(1853)、ウィーン(1856)に公衆浴場兼洗濯所が創設された<sup>69</sup>。

私たちの市長はすっかり喜んで、すぐにでも寄付をしてくれた者のために市庁舎の前に銅像を建てよう、また、8日以内に国民浴場の建設にとりかかろうというほどの勢いだっただ。ところが、新年を迎えるも、国民浴場はまだ影も形もない。「中略」しかし、何千人もの貧しい労働者に恩恵をもたらすものの、市議会議員自身は一銭も費やす必要がないという国民浴場には、再び議案となるまで何年もの時間が必要となる。「中略」たとえば、ビスマルクの記念碑を建てる場合ならば、土地管理委員会はもちろん急ぐだろう。しかし、彼らは国民浴場への関心はないどころか、ブルジョワとしての懸念が先にたっているのだ<sup>70</sup>。

ここの議論の対象が後に建てられた Müllersche Volksbad である。今でも綺麗なユーгентシュティール様式の公衆浴場として重宝されている。衛生状況だけではなく、スポーツを通して行った運動が国民の健康に重要であるという意識が芽生えたので、水泳ができるプールが中心となった。今では珍しい風呂の貸切ができる。

#### 4.3. ビーチ浴場 Strandbad

衛生的な理由で設立した河川浴場と国民浴場にレジャー要素が付け加えられ、都会の近辺にビーチ浴場が設立された。都会の一般庶民は海岸に旅行できなかったが、都市近辺の湖と河川でビーチ気分を求めている。それは、夏の日曜日に一般市民が河岸を占拠して、散歩する上流

68 Brockhaus (1901) p. 236.

69 “Bad” Brockhaus (1864) p. 530.

70 Münchner Ratsch-Kathl p. 1.

市民が苦情をよせても、警察が河川で遊んだり、横たわったり、泳いだりする人を追い払っても、抑えきれなかったほどだ。

1906年、フランス人記者がドイツ旅行感想記を公開した。「ベルリンから30分離れたワンゼーで大いに驚いた。バルト海の海水浴場でドイツ人の羞恥心が私が認めることができる偽善の限界を超えたという考えを持って帰った」とワンゼーの光景を描写した。

私は驚きからほとんど立ち直れなかったほどだった！ルールを知らなかったために婦人用ビーチに近づきすぎてしまったことで、私はノルダナイ島では訴えられる寸前の状態であった。ところが、ここでは、私は何百人といるほとんど裸のベルリンの若い少女たちの真ん中に立っている。私の目の前で、少女たちは母親に体をタオルで拭かれ、シャツを着せてもらっていた。また、何百人といる男性や少年たちは、ハンカチを細いひものように結んで腰につけたまま、縄跳びをしたり、レスリングをしたり、走ったり、体操したりと、その場に集まっている男女全てに自身の筋肉を見せていた<sup>71</sup>。

上流階級の人々は夏休暇をバルト海と北海の海水浴場で過ごしていたが、記者が見たのは下層階級の行動だった。

このころ、スポーツという概念は上流階級から労働者階級まで普及した。それによって、新しい身体認識が生れた。特に労働者たちは自分の身体能力を自慢し、それを恥ずかしがらず、むしろ見せたがった。市民階級のスポーツ協会は規律化された体操を重視していたので、自由に自分の力を発揮したかった労働者を受け入れたくなかったし、労働者も入りたがらなかった。1897年に四つの水泳協会が「労働者水泳連盟」に合流した。市行政が少しずつ一般市民を管理すべき対象から、彼らの道理に沿う希望を持つ個人として考えるようになった。

労働者代表は積極的に国民リゾートを要求した。

ベルリンの住民に必要なものは、特に自然の中の寛ぎ、森と芝生の翠、空の青、輝く湖、飛行機雲の風景、肉体の力を磨くことと空気や水の中の遊びでの魂のリフレッシュ。「中略」私たちと私たちの子供の健康回復のために特に価値がある主要な手段は日光浴と湖浴の堪能だ。以前は、富裕層しかできなかったことだったが、現在はわたしたちが無料で利用できるよう準備されている。

行政は第一次世界大戦の前にすでに動いており、ビーチ浴場を公認するどころか自ら設立するほどであった。住民は新しいレジャースポットであったビーチ浴場を待ちわびており、大勢が利用した<sup>72</sup>。

---

71 Engel, Wiese p. 14-16.

72 「オープンの日（1912年6月29日）から1912年10月13日まで来客数は11万7千人に上り、2万9千マルク以上の収入となった。」 Fischer p. 124.

#### 4.4. 家族浴場 Familienbad

海辺の混浴は海水浴文化の発展の大きな一歩であった。子供が砂浜で遊べば、両親がより長くビーチに滞在できたのである。混浴の解禁により現在の外願リゾート休暇が整った。

ドイツ浴場運営者は、「家族浴場」を発明した人間の銅像を設立しなければならない。というのも、それによってフランスとベルギーの海水浴場のような集客力を手に入れたからだ。「家族」という親しみのある響きの言葉は、ドイツ人にとって、海水浴の時間でも欠かせない「大人しさ」や「道徳」、「ドイツ的忠実さ」、家族生活の「仲睦まじさ」のイメージを思い起こした。ドイツの女性は、「道徳」が欠如した混浴のオストエンデへは行かない。それよりも、ドイツ人女性の昔の規律と秩序が保たれた、ドイツの海水浴場へ行き、「家族浴場」で入浴するのである。

しかし、フランスとベルギーでは、混浴 *bains mixtes* は昔から設置されていた。オランダでも、約10年前から設置されるようになった。そして、結局はドイツも、4年前からすました態度を捨てることとなった<sup>73</sup>。「省略」

以上の著者はその後、ユダヤ教徒は絶対にそのような浴場には行けないと述べており、文は家族浴場を利用するドイツ人の態度への皮肉となっている。

19世紀前半の「家族浴場」の例として河川浴場の提案<sup>74</sup>と同じ著者により鄙びた温泉<sup>75</sup>の報告であったので、この表現はすでに19世紀の始めに存在したことになる。しかしここで指摘された家族浴とは娯楽目的ではなく、衛生のための浴場であった。

海水での混浴の風習は、上記の史料に従ってフランス・ベルギーからオランダに渡り、それからドイツに広まった。1886年のオランダの史料をみてみよう。

経済を繁栄させるもう一つの方法は、浴場の設備にあるようだ。現在、契約案の規定で、男性と女性が別々に入浴するための場所を残すべきであるとしていることは、ベルギーやフランスの海辺のリゾートの多くで慣例となっている混浴を導入することを意味する。この慣例は混浴 (*Bains Mixtes*) 又は家族浴場 (*bains de famille*) と呼ばれている。オストエンデでは、ル・パラディという場所があり、そこでは衣服なしで入浴できる。このようなことが、海辺のリゾートが多くの人たちを誘惑する理由の一つであることは間違いない。雑誌「*la Vie moderne*」にも見受けられたが、女性はときどき浴場ガウンを着ずに入浴している。しかし、私はそのような習慣が私たちの道徳に適合しているかどうか疑問視している。我が国にこれを導入したら、まじめなオランダとドイツの入浴客を追い払い、代わり

---

73 Preuß p. 23.

74 Jäck (1819) 頁番号がない。項目 *Öffentliche Spaziergänge* (公共散歩道)。

75 Jäck (1822) p. 321.

に、別のあまり望ましくない人々が来るのではないかと危惧される<sup>76</sup>。

1886年にオランダでは混浴の導入が議論された。当時のオランダ人にとって混浴はベルギーとフランスの習慣であった。オストエンデでは海水車が使われているが、男女が分けられていたわけではなく、一緒に海水浴を楽しんでいた<sup>77</sup>。

さて、ドイツ国内に始めて混浴が導入されたのはヘルゴランド島である。ヘルゴランド島は陸から遠く、唯一のビーチは本島から少し離れた海の中の砂丘のような島であった。島の観光局は、地理的な不便さをカバーするために男性浴場と女性浴場のほかに家族浴場を導入し、人気を博した。

この家族用浴場は、3年前に試験的に導入された。東砂丘の砂浜の最も素晴らしく、最も美しい場所が家族限定で提供されている。地元の入浴局が全力を尽くしていることは、海水浴場のこの最も良い場所を完璧な家族浴場として維持していることと、桁外れに多い来場者数が明確に示している。子供たちは美しいドイツの北海の海水の中で遊ぶことができる。

ヘルゴランドには、ドイツの海辺のリゾートとして、最初にこの新しいアイデアを推進したという名誉があるとはっきり述べたい。3年間の家族浴場の経験が今の運営に役立っているのだ<sup>78</sup>。

これらの記述によると、19世紀末に家族浴場が導入されたようである。その後、行政に反対されたにもかかわらず、バルト海等の海水浴場の経営者が家族浴場を導入した<sup>79</sup>。実際に、1914年のある折込みチラシに広告を出した海水浴場に注目すると、バルト海の26の海水浴場のうち7つに、家族浴場があると書いている。

午後は主に Gänsehäufel で過ごした。それは、ドナウ川の旧分流でのビーチ浴場だった。昔のような浴場での男女が完全に分けられるというルールは崩れ、男浴場・女浴場に加えて家族浴場が導入されたことは最新のセンセーションだった。但し、ここでは旧制高校一年生は入場を許可されず、カップルまたは家族のみの場所とされた。高校生は、家族浴場に最も入りたがっていたが、所帯を持っていなかったため、入場資格を与えられなかった。そのため、Gänsehäufel ではすぐにある種の株式市場取引が発生した。つまり、高校生は同じように家族浴場に入りたがった女性の入場券を支払うことで、入場に必要の連れを雇うことができたのだ。「中略」それで夫婦として入口を通り抜け、互いに好意を感じない限

76 Rooyen p. 181.

77 Die Grenzboten p. 11-18.

78 Badedirection Cuxhaven-Helgoland p. 18.

79 Heinikel, Bresgott p. 108.

り、ただ礼儀正しく感謝し、二度と会わなかった。しかし、若し互いに好意を感じた場合、(男女の出会いのきっかけとなったので) 超道徳主義によって生れた規則が不道徳な方向に働いた<sup>80</sup>。

「家族浴場」は導入から有名無実の方向を辿った。第一次世界大戦後には、「家族浴場」は当たり前前の存在となり、大都会の周りに複数つくられた。

## 5. 入浴の社会・文化的な意味

浴場は非日常の場所であった。このような場所では、理想の社会をつくる実験が行われた。その意味では、ドベラーンの果たした役目としては、メークレンブルク・シュウェリーン大公国の経済振興策や国民健康への貢献だけではなく、社会的実験の場でもあったことが挙げられる。Vogel は浴場で理想の人間関係を説いた。

まず、社交の場でよく使われる口調と広い人間関係は浴場への来客の一般的な満足度に最も大きな影響を及ぼす。この口調がより人間味があって、くだけていて、他人からなにも求められないほど、人々は益々陽気さと喜びを感じられる。そしてこの雰囲気は人々を幸せにし、さらに多くの人々を集める。人々は、自分の意見の押し付けで他人を煩わせないことで、来客同士信頼しあい、恥を感じずに社交できる。また、自分が迷惑をかけない限り、互いに無視したり、またはそれ以上の侮辱を受けたりせず、皆から尊重される。このように快適さと喜びがあるところだから、誰もが喜び勇んで行くのだ。優しい口調というものは、真の礼儀、人間性、および友好的な思いやりを前提としている。たった一人にとって不快な話題さえも慎重に回避するセンスこそが、魔法のように社会の輪を広げ、多くの満足した人々を素早くひとところに結びつけるのだ<sup>81</sup>。

後にも浴場の平等な人間関係が訴えられた。1798年、Vogel は自らのレポートにおいて、様々な地域・国・階級の教養がある人々が交流するという理想をまるで現実のように描いていた<sup>82</sup>。しかしこの理想は Lichtenberg の提案の段階から排他的でもあった。

高貴な人々は、綺麗な景色を持つマーゲートよりも、その他のあまりきれいではない海水浴場のほうをよく訪れる。なぜなら、ロンドンからテムズ川を使って行き来するのが簡単すぎて、下品な者も多く集まってくるからだ。彼らはいい衣装を身につけているので、排除できない。しかし由緒正しい家柄がなくてもマナーがある人はこのような者との接触

80 Waldenegg p. 200-201. 20世紀初頭の記憶である。

81 Vogel (1797) p.15.

82 Vogel (1798) p. 224.



を嫌がる<sup>83</sup>。

Lichtenberg は中流階級との距離を強調した。しかし、それは先祖を誇る貴族だけではなく、教養市民も同様であった。これは貴族と教養市民の共通認識だと Lichtenberg は訴えた。Hufeland も Vogel とほぼ同じ理想を唱えた。

「前略」作法と身分は問われない。ここでは、上の階級もしくは下の階級との付き合いが区別されていないのである。なぜなら、このような付き合いを区別するという考え方が、他の温泉街に嫌な対立をもたらししていることはよく知られているからだ。ここでは、一般的な道德と人々の主な目的である治療、そして娯楽に合うような喋り方で人々は時間を過ごしている。それによって多彩な交流や会話、陽気さや楽しみの平等感が生まれる。「中略」ここでは、みんなが互いに脱帽しなければならないという規定がある<sup>84</sup>。

他の海水浴場にも似ている理想があった。トラーベミュンデの例を挙げよう。

海水浴場に集まった（お客さんたちが構成する）小さな共和国には、各自に責任がある。共同の娯楽を利用するだけでなく、積極的に娯楽を作り上げたり、作法にこだわらずただ楽しく付き合ったりすれば、海水浴場は魅力的に、生き生きするようになるのだ。「中略」客は教養的な家族が使う口調によって、互いへに親近感を持ち、開放的な付き合いを行う。つまり、上流階級的な作法を避け、自己を縛るものから自らを解放するのだ。そうすることで友人を招きたいと思えるところになる。田舎風の質素な生活スタイルをしたほうがよいとされたのである<sup>85</sup>。

ここでは、皆が平等である「共和国」の他に「家族」も一つの理想であった。しかし、その時代に海水浴場を訪れていた客はかなり限られた階級の人々であった。そのような共通意識を持った階級の間では、貴族か貴族でないかは問われなかった。ここは自由奔放で、日常のストレスを吐き出せる場所ではなく、理性を備えている教養市民の私的な交流の場であった。しかし、後にドベラーンに来客が増えると、この高い理想を維持できなくなった。Vogel の理想に好意的であった大公が、その理想に沿って行動したが、やはり大公の周りには貴族たちが集まった。地方の貴族たちはこの理想に共感しなくてもドベラーンに集まってきた。メークレンブルクの貴族の多くが農業を経営し、離れて暮らしていたので、喜んで集まる機会を利用したのだ。これによって、ドベラーンは、教養市民にとって息苦しい雰囲気となった。

---

83 Lichtenberg.

84 Hufeland (1799) p. 159.

85 Lembke p. 46-48.

すべての入浴者は自分の称号、勲章を家に置いてくるべきだ。貴族もブルジョワも、譲りあいたがらないが、誰も入浴の順番を変られないということを我慢しなくてはならない。客は皆、浴場で上に座ろうが下に座ろうが、自分は2番目だと考えればよい。皆が自分を2番目だと思えば、順位争いはないだろう<sup>86</sup>。

実際には、Vogelが避けたがった客同士の序列争いが繰り広げられたために、手が打たれた。たとえば、劇場には公家とハーン伯家のためのボックス席しか造られておらず、それ以外の客は皆一般席を購入しなければならなかった。また、入浴規則には、到着順に入浴することが厳しく定められていた。さらに、広場と鉄泉入浴場では週2回の会合が開催され、そこでは参加者にかなりの低価格で清涼飲料が提供された。この企画は「昔の身分ごとの分裂を乗り越える良い一歩だ」と評価された<sup>87</sup>。当時、人々は、1820年代半ばの「昔ながらの」身分的な分裂に苦しめられていた。たとえば、この企画のなかでも、「低価格」という点から、教養市民がそれほど裕福ではなかったことが窺える。しかし、多くの貴族たちが集まったことで、貴族たち自身の価値観はひっくり返されることとなった。19世紀半ばには、ドベラーンの湯治客は1400人～1500人となり、そのほとんどがメークレンブルクの貴族であるというレポートもある<sup>88</sup>。

ドベラーンでメークレンブルク人と外国人の恥ずかしさが来訪の妨げになるというのは思い込みだ。愚かな者はそのようにふるまっているが、賢い者はそれをすべて入浴の場の自由であると捉え、この恥ずかしさを忘れる。行政の都合と共通の理解に従って身分に分かれたが、第三身分は、3つの文字を<sup>89</sup>持っていなくとも、他の身分から文句を言われるような理由はほとんどない。この身分が最小の身分というわけではないし、はたまた最も無知な身分というわけでもない。また、この身分の人々には、この場所よりも自由に仲間と交流できるところがないのだ<sup>90</sup>。

「先略」すべての来客たちは、無駄なフランスの燕尾服で登場した。なぜ？なぜなら、大公殿下は、昼食には燕尾服で主宰し、夜食でも燕尾服を着ている。健康のために集まっているリゾートなのに、人々はどう思うだろうか？自由なリゾートでの強制！「中略」大公が座る前には誰も座っていない、大公が立ち上がる前には誰も立ち上がらない、そして大公が立ち上がったらすぐには誰も座らない。大公がこれらのばかげた迷惑なルールを求めていることは確かだ。求める？そのとおり。賢明な人は、自分に権利がないことを要求しない。そして、大公は、ドベラーンが一般的なりゾート地であり、宿舎の食卓が公開さ

86 Dresen p. 59.

87 Freimüthiges Abendblatt (1826) p. 605.

88 Spengler p. 94.

89 貴族の苗字の中の“von”。

90 Freimüthiges Abendblatt (1831) p. 707-709.

れている限り、権利を持たない。しかし、彼がエチケットを消し去ってしまいたいのであれば、なぜそうしないのだろうか？彼は一度だけでもフロックコートで登場する必要がある。「中略」だから私は、彼が弱者への想いを証明しなかったことに関して責めている。大公が弱者のことを気にかけていることは間違いのないからだ<sup>91</sup>。

著者が堅苦しい雰囲気を歎いた後、食事の少なさとまずさ、サービスの悪さにも苦言を呈した。ここで人気の競馬さえも、著者は本国イギリスとは比べ物にならないと批判した。

ここで出会った人々は数字とお金のことしか考えていないような、ロストックの古臭い商人たちである。そして、ロストックの夫人は最新のファッションを身にまとっているが、マナーが古臭い。その他には、神様によって呪われたギャンブラー。一体何が魅力的だろうか<sup>92</sup>。

著者は宮廷のような堅苦しさだけではなく、ロストックの市民層にも不満を抱いた。彼は有名な海水浴場の評判に裏切られたのだ。次の報告者は1830年代末にドベラーンに滞在した。

メークレンブルクの貴族の単調さを除けばいい。というのも、最も壮大な自然をみても、彼らは硬い姿勢を崩さないだろうからだ。「中略」私にとって最も気に障ることは、メークレンブルクの貴族のまっすぐに一方向しか見ない、街灯柱のような顔つきだ。この貴族たちは自分の階級同士についてしか話さない。Basedow氏はRemplin氏についての退屈な話ばかり、主な話題は馬、狩猟犬、またはレースだ。貴族の女性はメークレンブルクでほとんど話さないが、ドベラーンでは全く話さない。質問に対する答えは鼻にしわをよせるだけだ。

先ほど述べたとおり、メークレンブルクの貴族はドベラーンでも目障りだが、最近亡くなった大公は、ドベラーンを訪れた時、すべての身分に対する家族のような親しい態度を示し、それによって身分に縛られない考え方に貴族たちをより順応させた。しかしその反対勢力である弁護士たちもメークレンブルクの恥だ。「中略」ドベラーンの定食の食卓で貴族と彼らの訴訟以外の話題を聞いたとき、それは特別な瞬間と見なすことができる。ちなみに、退屈でしかない。あるとき、メークレンブルクの弁護士が話を盛り上げるために、メークレンブルクの公正の女神がハーン伯爵の世襲財産以外のすべての財産を奪った方法について全くの躊躇なく語ったことがあった。「この世襲財産のせいで、伯爵家を破滅させられなかった。」法律の代表者による法律の乱用よりも恥ずべきことはないだろう。そんなことについて話すというのは、恥知らずでしかない<sup>93</sup>。

---

91 Seyffarth.

92 Seyffarth.

93 Beurmann. 著者自分は弁護士であった。

先に挙げた史料の中には、貴族の他に、来客の商人に対する苦言もあった。また、上記の史料の著者による、教養階級に所属するはずの弁護士に対する苦言もある。

1840年代まで、地方貴族が街を埋め<sup>94</sup>、市民には過ごしにくい雰囲気があったことが、ドペラーンの人気の低迷の理由の一つであった。新しく海を求めるようになった中流階級はドペラーンを敬遠するようになった。市民層は新しい海水浴場に向かった。市場が大きくなったので、ドペラーンに来客が途絶えることはなかったが、他の海水浴場の知名度には負けていた。ワルネミュンデはドペラーンと対比される存在として、楽しく快適な家族生活を送れるような場所だと説明された<sup>95</sup>。ドペラーンの海水浴場設立のおよそ10年後、「家族的」な付き合いは理想として流行し始まった。

「浴場の自由」(Badefreiheit)という概念は19世紀初頭まで存在しており、人々は入浴場での厳しい作法から解放された。しかし、同時に、湯治客はゆとりと教養を持たなければならなかった。19世紀半ばには入浴客が増えたが、自由が制限・制約されてきた。その一例として、ワルネミュンデのビーチが初期に男女別れたが、それ以外は自由であった。また、女性の脱衣所に近着くと罰を与えるようにロストックの新聞<sup>96</sup>に書かれた。都会の価値観が海水浴場に入り込んだ。それでも都会と違うより自由で、ゆとりがある生活で都会の暮らしに影響を及ぼした。列車の発展は海水浴場をより身近にした。海水浴場での生活は中流階級の一つの理想になって、都会の住宅の内装にも影響した。海水浴場を理想とする考え方は都会の人々の価値観にも変化をもたらした<sup>97</sup>。都会生活は人間に合わない場所で、逆にリゾートでの生活は人間らしい自由な生活とみなされた。

ドイツ語に Körperkultur (身体文化) という単語がある。これは健康維持という意味として使われた。それは20世紀初頭に理想的な体を養うための生活様式や思想へと、その意味はより広がっていった。医学の進歩によって、身体は神が与えた運命だから変えられないというようなものではなく、努力によって変えられるものであるという考え方が広がった。衣装の中に隠れた身体が浴場で開放され、海水浴によって新しい身体感覚と意識が生まれた<sup>98</sup>。生活改革運動は、都会の住民を汚染された都市環境から光と空気であふれた生活環境へと導き、19世紀の社会構造と常識から解放することを目的とした。「身体精神一致」が求められ、健康な身体には健康な精神が宿ると考えられた。

空気は完全に無塵で、水面は広い湖のようだ。この Gänsehäufel 島は牧草地とドナウ川の

94 コルバンはブライトンの海水浴場が貴族の嫁・婿探しの場所であったことを詳しく解説している (p. 490-492)。貴族についての苦情が書かれていても、そのような話が出ない。しかし地方の貴族は都会の上流階級程頻繁に交流できなかったのも、重要な交流の場であったことを想像できる。

95 Schütz p. 6.

96 Freimüthiges Abendblatt (1834) p. 765.

97 Heinickel, Bresgott p. 100-111.

98 ロッシュ (2000) p. 106.

砂でできている。柳の迷宮、原生林、まるで巨人の編み物だ。可哀想な都市の住人の身体に生命エネルギーをもたらすこの島を、聖域のように守ってくれ！プラタ通りにはまだ大都市の毒が立ち込めているけれど、15分歩けば、島ですべての有害な影響を流し清めることができるのだ！涼しげな柳の枝の幕の中から自然が愛情をこめて君を見つめている。そして、強いることはせずに自然の再生の力を与えてくれる！自然がまるで聖なる島のように私たちに力を与えてくれるというのは生理学的な真実であり、自然とは古いおとぎ話の時代から現代にいたるまで、若者の生命の源なのだ！虐待され、ほぼ窒息した皮膚は、何十億もの毛穴で光と空気を吸い込む。皮膚が必死に身体が受けたすべての罪をカバーしようとしている。同時に、魂が、神の平和に励げまされ、自らの抑制と鈍化を引き起こす不安を取り除いている！目が風景の偉大さを取り込んで、都市の恐ろしい騒音から離れ、耳はその静けさの中に休んでいる！「中略」自然が平和と秩序をもたらしますように！このドナウ島 Gänsehäufel は、尊い場所であり、罪深い体の巡礼の場所だ<sup>99</sup>。

浴場は宗教的な場所として描写された。これは娯楽を超えて、現代人の「信仰」や「世界観」になった。その延長として、裸体主義がドイツで流行して、新しい社会モデルにまで成長した<sup>100</sup>。ドイツにとって屈辱であったヴェルサイユ条約とそれにもなう兵役廃止の後、スポーツは「病んだ国体」の回復のために不可欠と見なされ、水泳は身体能力と勇気を高める効果があるとされた<sup>101</sup>。国家と自治体は国民の健康のためにスポーツを促進して、室内プールの建設は自治体の重要な課題になった。

今は（昔）より健全な時代だ。野外浴場は二人で訪れてもいいのだが、特にそれが絶対というわけではない。なぜなら、遊びのために来ているのではなく、自分の身体に空気と光を吸わせるために来ているからだ。多くの方々が来るべきなのだ。そこでは、次のような姿の若い女性が見られる。彼女たちは普通の水着ではなく、媚びるような意味合いはなしに、ブラジャーのようなものと小さな男性用の海水パンツをはいている。リリアン・ハーベイも、「へそ見せ」のようなかっこうで写真を撮らせたという。「中略」ここでは、「魅力」は重要でなく、人々は「力と美しさへの道」を目指してやってくるのだ<sup>102</sup>。

これは極右の記者シュタインの1931年6月31日の社説であった。極右の人間も新しい入浴文化を認めた。しかしファシスト的な美的が家にある「力と美」の観点で強く野性的な力を賛美する形で解釈したのである。メディア、特に映画スターの影響も見られた。

1932年9月28日に保守派のプロイセン州の代理特任長官が「正しい」水着のための規定を通

99 Altenberg p. 14-15.

100 平井参照。

101 Renges p. 22, Hauner p. 197.

102 アードルフ・シュタインの社説、Stein p. 307-308.



達した。左派だけではなく、右派の新聞もその時代遅れな考え方と回りくどさを皮肉った。それに対し、シュタインが自分の一年前の社説を無視して、この規則を弁明した。このとき、ドイツは国民に対し、他国民のような控えめの行動を求めた<sup>103</sup>。しかし、同じ社説のなかで、一般の目から隠れた特定の場所であれば、ヌーディスト活動を認めるような内容も記されていた。

## 6. おわりにかえて

浴場の建設は、行政主導から民間主導に変わった。君主と教養市民の交流の場を理想とした海水浴場は、地方貴族の社交の場になった。しかし、早い段階で、中間層は自分に合った家族的なリゾートをつくった。このような19世紀のリゾート開発は、今の国際観光の先駆けともいえる。また、20世紀まで、健康志向は海水浴の原動力と建前であった。出発点は海水のもつ健康効果だったが、1800年代には海の空気の効果が注目され、19世末には光の効果（日光浴）が加わった。リゾートへの憧れは19世紀中に膨らみ、20世紀半ばからはその実現が求められた。

ドイツ国民の間でも、リゾートへの憧れは高まった。その気持ちを利用して、ナチス政権は人々にリゾート休暇を約束した。それによって、労働戦線の配下組織であった歓喜力団（KdF）は観光業者に圧力をかけ、安い値段で今までよりも多くの労働者階級の人々にリゾート休暇を可能にした。しかし、その目玉プロジェクトである「2万人のリゾート・プロ——ラ」は未完成のままであった。

戦後には、マイカーの普及によって、国内外のリゾートは国民にとって手が届く範囲となった。キャンピングという新しい宿泊スタイルの普及に伴って、旅行は民主化されていった。イギリスと違って、ドイツでは海水浴場の衰退は大きな問題ではなかった。海外のビーチリゾートの人気は急増したが、旅行者の数が増加したことで、2回目の休暇や週末旅行の目的地として国内のリゾートにも十分な来客がみられた。1980年代までは、健康保険も保養のために大人にも子供にも海浜休暇を提供した。

20世紀中頃には、リゾート休暇をとることができる国民の割合は高くなった。それに伴い、複雑化するニーズに合わせてリゾートも多様化した。休暇、海水浴、日焼けの他に、遊びたい下層階級の若者のためにマヨルカ島の Ballermann<sup>104</sup> のようなリゾートが発展した。リゾートのある国にあまり関心のない人々のためには、食べ放題や飲み放題のサービスが提供される、ただくつろぐためのリゾートが発展途上国につくられた。また、週末と短期休暇のためには Centre Parcs という室内のリゾートが開発された。公営と民間のプールがスライダーや人工波で娯楽へのニーズに、あるいは、様々な種類のサウナによって健康志向へのニーズに応えようとした。このようなプールは、人々に日帰りのリゾートでの休日を提供している。ドイツの海浜リゾートが、現在ではどのように多様化した人々のニーズにしているのか、これは今後の大きな研究テーマである。

103 アードルフ・シュタインの1932年10月6日の社説、Stein p. 310.

104 スペイン語の balenario（浴場）からドイツ語の愛称に発展、ビーチ・酒・パーティの三拍子の代名詞になった。

### 参考文献

- アルブレヒト・シュタイネッケ（富川久美子訳）（2018）『ドイツの観光学』、ナカニシヤ出版。
- 平井昌也（2013）「ドイツにおける FKK（裸体主義文化）の歴史：ドイツ第二帝国からヴァイマル共和国までの時代を中心に」、大谷大学西洋文学研究会『西洋文学研究』33号、11－36頁。
- 富川久美子（2013）「ドイツの観光市場における島嶼の発展と観光形態の変遷」『地理学』8－4。
- アラン・コルバン 福井和美訳（1992）『浜辺の誕生』、藤原書店。
- ロイ・ポーター「イギリス人と余暇」アラン・コルバン 渡辺響子訳（2000）『レジャーの誕生』、藤原書店、21－64頁。
- アンドレ・ロッシュ「ヴァカンスと自然再訪」アラン・コルバン 渡辺響子訳（2000）『レジャーの誕生』、藤原書店、97－140頁。
- Allgemeine deutsche real-encyklopädie für die gebildeten Stände (1864) Leipzig.
- Peter Altenberg: *Die Donauinsel »Gänsehäufel«, Strandbad bei Wien* in: *Märchen des Lebens*, Fischer Berlin 1908.
- Badedirection Cuxhaven-Helgoland *Beschreibung des Nordseebades Helgoland* Helgoland 1903.
- Bäder-Almanach* (1901) Mosse Berlin.
- Beurmann, Eduard (1839) *Mecklenburg - Das Ostseebad Doberan* in: *Deutschland und die Deutschen*. Bd. 2. <http://www.lexikus.de/bibliothek/Mecklenburg-Das-Ostseebad-Doberan>.
- Bräuer, Uta Maria; Lehne, Jost (2013) *Bäderbauten in Berlin*, Lukas Berlin.
- Brockhaus (1864) *Allgemeine deutsche Real-Encyklopädie für die gebildeten Stände* Bd. 2, Brockhaus Leipzig.
- Brockhaus (1882) *Allgemeine Conversationslexikon*, Brockhaus Leipzig.
- Brockhaus (1901) *Konversationslexikon*, Brockhaus Leipzig.
- d' Aumerie, Johan (1837) *Das Seebad zu Scheveningen in Holland*, Char Cleve u. Leipzig.
- Dresen, W. *Doberan und seine Umgebungen. Malerisch, geschichtlich und topographisch geschildert*. Rostock 1834.
- Engel H, Wiese A (2007) *Das Strandbad Wannsee: Erholung für Körper und Seele*.
- Flehsig, R. (1889) *Bericht über die neueren Leistungen auf dem Gebiete der Balneologie* Schmidt's Jahrbücher der in- und ausländischen gesammten Medicin Bd. 223 Leipzig, p. 73-91.
- Hauner, Franz (2020) *Licht, Luft, Sonne, Hygiene: Architektur und Moderne in Bayern zur Zeit der Weimarer Republik* Walter de Gruyter Berlin/Boston.
- Heinickel, Gunter; Bresgott, Hans-Christian (2004) *Historische Raumpartnerschaften zwischen Berlin und Heringsdorf/Usedom*, in: Dienel, Hans-Luidger, Meier-Dallach Hans-Peter, Schöder Carolin Hsrg. *Die neue Nähe* Wiesbaden/Stuttgart S.100-111.
- C. Herrlich red. *Briefe aus Mecklenburg (Mitte September 1875) 3. Doberan* Aus: Wochenblatt der Johanniter-Ordens-Bally Brandenburg, Band 16, Berlin, 1875. [http://www.lexikus.de/bibliothek/Briefe-aus-Mecklenburg-\(Mitte-September-1875\)-3-Doberan](http://www.lexikus.de/bibliothek/Briefe-aus-Mecklenburg-(Mitte-September-1875)-3-Doberan).
- Hufeland, Christoph Wilhelm *Makrobiotik oder die Kunst das menschliche Leben zu verlängern* 1797 p.421-422.
- Hufeland, Christoph Wilhelm *Makrobiotik oder die Kunst das menschliche Leben zu verlängern* 1823<sup>4</sup> p. 205-206.
- Hufeland, Christoph Wilhelm *Flüchtige Reisebemerkungen*, in: Hufeland Journal der practischen Arzneykunde und Wundarzneykunde 1799 pp. 156-167.
- Jäck, Joachim Heinrich (1819) *Bamberg, wie es einst war*, Palm u. Enke Bamberg.
- Jäck, Joachim Heinrich (1822) *Wien und dessen Umgebungen* Landes-Industrie-Comptoir Weimar.

- Kind, Richard (1828) *Das Seebad zu Swinemünde*, Morin Stettin.
- Kortüm, August (1858) *Das Doberaner Seebad Der heilige Damm, seine Curmittel und ihre Verwendung für Curgäste und Ärzte*, Stiller Rostock.
- Lembke (1803) *Ueber die Privat-Seebadeanstalt bey Travemünde*, Lübeck.
- Lichtenberg, Georg Christoph (1793) *Warum hat Deutschland noch kein großes öffentliches Seebad?*, in: Göttinger Taschen Kalender [https://www.lichtenberg-gesellschaft.de/pdf/gtc\\_1793\\_seebad.pdf](https://www.lichtenberg-gesellschaft.de/pdf/gtc_1793_seebad.pdf)
- Lotz-Heumann, Ute *Wie kommt der Wandel in den Diskurs?* in: Landwehr, Achim *Diskursiver Wandel*, Springer 2010, p. 281-308.
- Mühry, Karl (1836) *Über das Seebaden und das Norderneyer Seebad*, Hahn Hannover.
- Münchener Ratsch-Kathl (1894) *Übrigens meinen wir, endlich heraus mit dem Volksbad*, Nr. 75 6. 10. 1894.
- Ortschronik, [https://www.ortschroniken-mv.de/index.php/Fortlaufende\\_Chronik\\_des\\_Klosters\\_und\\_der\\_Stadt\\_Doberan](https://www.ortschroniken-mv.de/index.php/Fortlaufende_Chronik_des_Klosters_und_der_Stadt_Doberan), 閲覧8. 6. 2020.
- Patriotische Gesellschaft von 1765 (1795) *Commissions-Bericht, über den Vorschlag zur Anlegung einer Seebade-Anstalt im Amte Ritzebüttel* in: Verhandlungen und Schriften der Hamburgischen Gesellschaft zur Beförderung der Künste und nützlichen Gewerbe, Bohn Hamburg 177, p. 369-384.
- Peter (1844) *Briefe über Doberan im Sommer 1844*, Freimüthiges Abendblatt p. 854-860.
- Preuß, Israel (1904) *Familienbäder* in: Israelitische Monatsschrift No. 23, p. 23.
- Pröpping (1834) *Korrespondenz-Nachrichten* Freimüthiges Abendblattp. 763-765, 907-909.
- Servaas van Rooyen, A.J. (1886) *Dr. Johan Christiaan Gottlob Evers*, Het Lees kabinet No. 1-2, 53, A. W. SIJTHOFF Leiden, p. 177-183.
- Röper (1808) *Geschichte und Anekdoten von Dobberan in Mecklenburg*, Dobberan.
- Renges Yasmin (2015) *Die Stadtbäder der Goldenen Zwanziger*, Dissertation Universität Köln.
- Sachse, Johann (1835) *Ueber die Wirkung und den Gebrauch der Bäder, besonders der Seebäder zu Doberan* Berlin.
- Schütz, Friedrich (1843) *Das Seebad Warnemünde an der Ostsee*, Universitätsbuchhandlung Rostock.
- Seyffarth, Woldemar (1832) *Doberan, den 16. August 1832* Aus: Bunte Briefe. Erster Teil. <http://www.lexikus.de/bibliothek/Doberan-den-16-August-1832>.
- Spengler, Ludwig (1858) *Das medicinische Mecklenburg*, Enke Erlangen.
- Gerd Stein *Adolf Stein alias Rumpelstilzchen: "Hugenbergs Landsknecht" - einer der wirkungsmächtigsten deutschen Journalisten des 20. Jahrhunderts* LIT Berlin 2014.
- H.T. (1874) *Sommerliche Plaudereien aus Doberan* in: Der Sporn. Zentralblatt für die Gesamt-Interessen des deutschen Sports. <http://www.lexikus.de/bibliothek/Sommerliche-Plaudereien-aus-Doberan-in-Mecklenburg>.
- Vogel, Samuel (1819) *Handbuch zur Richtigen Kenntnis und Benutzung der Seebadeanstalt zu Doberan*.
- Vogel, Samuel (1794) *Über den Nutzen und Gebrauch der Seebäder* Franzen u. Grosse Stendal.
- Beylage Staats- und Gelerhrte Zeitung des Hamburgischen unpartheyischen Correspondenten 17. 5. 1797.
- Vogel, Gerd-Helge (2018) *Die Entstehung des ersten deutschen Seebades Doberan-Heiligendamm: unter dem Baumeister Carl Theodor Severin (1763-1836)* Donatus Niederjahna.
- Waldenegg, Egon Berger (1998) *Biographie im Spiegel: die Memoiren zweier Generationen* Böhlau.
- Die Grenzboten (1841/1842) *Die Seebäder in Ostende*, 1. Jg., Bd. 1, Herbig Leipzig, S. 11-18 [https://de.wikisource.org/wiki/Die\\_Seeb%C3%A4der\\_in\\_Ostende](https://de.wikisource.org/wiki/Die_Seeb%C3%A4der_in_Ostende).